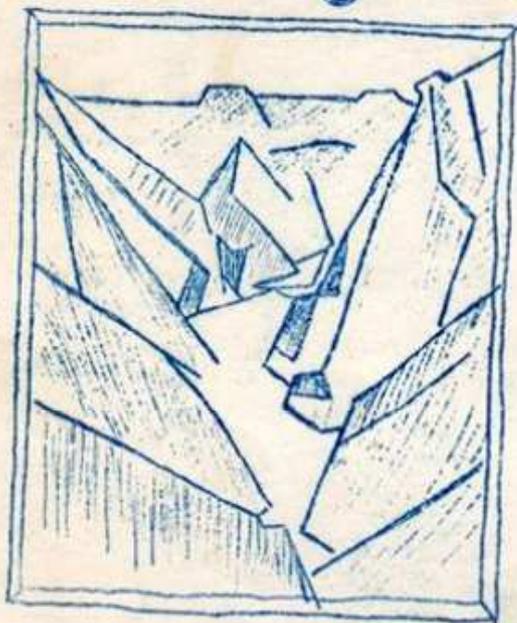


稜溪



No. 10.

APRIL. 1959



何故人は山へ登るのだらう。
何故好んで、氷の岩尾根を
登って行かうとするのだらう。
この自ら悦んで求める忍
苦の行爲を人が棄てない
ちは、私は人間の尊いねがひ
を疑はないだらう。

串田 孫一
"若き日の山"

目次

晩秋の中央アルプス
 一 駒から空木岳へ 亀江資文(2)
 瀬 悦男

=座談会= 『会の在り方』 (6)

=アンケート= “登りたい山 行きたい山” (10)

富士冬山技術講習会参加報告 篠原健二(13)

=合同山行= 妙義山 高倉良輔(14)

幽の沢ールンゼ 柿沼 博(16)

茅ヶ岳 近藤澄江(19)

秩文日記 大武 昭雄(20)

梟体登山大会雑感 山縣昌考(24)

=我が心の山々=
 私と一の倉 辻 勝四郎(26)

あの人、この人出合の記 辻 宏 視(30)

=仲間と語る(8)= 近藤澄江さん { 筒井 満 栄
 菅野 達 也(32)
 小林 敏 子

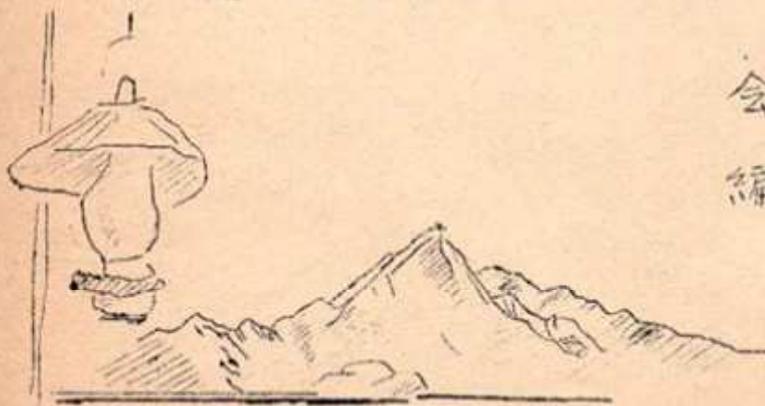
=白毛門とめぐる沢= 大倉沢 山縣昌考(34)

一の倉 X ルンゼ 篠崎 介二(36)

会務報告 (23)

編集雑記 (38)

昭和33年9月～12月





期日 11月2日〜4日

メンバー 辻勝四郎、龜江資之

栗瀬悦男、篠原健二

才一日(11月2日)

終列車はとも乗れそうもないとあ
らため準備を小んばつしたものの、こ
れが又異常なまでの混雑振りで、やっ
と車室の一角にもぐり込む事が出来
た。

ねむい目をこすりながら薄暗い赤穂駅
に降り立つと相当の寒気が感じられた
。悪い事に小雨がパラついていて。バ
スの発車までかなりの間があり、待ち
切れないうち中は暴勢にもハイヤーを雇
ばして先を急ぐ。我々の今日の行程は
六時間半、そう急ぐ事もあるまいし、
そのうち雨も上るだろうと言う事で駅
の待合室に膝を落着けてバスを待つ。
周囲が明るくなり新雪を着けた木曾
駒ヶ岳を始め中央連山がうつすらと姿を見
せる頃やつと一番バスの発車となる。
三十分も激しくゆら秋終奥管ノ台で
バスを捨て、沢沿いになおも続くトラ
ック道をたどる。雨は依然として止ま
ず、沢の水音のみが耳をつく。二十分
も来た頃右の細い尾根を降りて来る土
地の人に駒ヶ岳への径を教えられる。広
い自動車道と分れこの尾根径を辿る。
尾根の中腹をだら／＼と歩いて行く
径にいいかげんあきる頃、何となく遠
回りしている所に感じ、地図をとりに出

して調べて見ると予定して居たルー
トと違っており、今更もと来た径を
戻るのも業腹だし、こゝは一つ会の
面目にかけてガツチリした縦走をし
ようと言う事になる。

深い一面のガスの為視界の効がな
い中を小一時間も歩いた頃、かなりの
の水壺を持った沢に出合、すぐ横に
北御所蛇腹と印された立札が立つて
いる。時計を見ると十一時、朝食が
早かつたせいかわ腹を感じ、こゝで
コーヒーとパンで食事をとる。径一
杯に救われたしつとりと濡れた落葉
を踏んで行くと間もなく針葉樹に囲
まれた清水平(駒ヶ岳四合目)に着く。
丸木で組んだベンチがあり一息入れ
る。こゝからは丁度奥秩父を思わせ
るような森林帯と変わり、今迄のだら
／＼した平坦な径もやつと登りらし
い登りとなる。

我々の他に人影とてなく、流れる
汗を拭きながら登ること一時間、細長

一丁ヶ池に出る。此処で初めて降り
来る登山者に会い小屋の状態を聞く

ウスも幾分きれて背の低い椎木帯を
下ると急に視界が開け、登路も千畳
の面への径と別れる。これを左に見
西駒ヶ岳を指す區松帯に入ると
新雪が現われて来る。空模様
大部長くなり、太陽こそ出ていない
とうやら明日の好天を期待出来そう
である。

まは左に大きく曲ると、突然真白な
雪が現われ展望の良い地帯にとび出
背後には南アが全貌を見せ、目前
は駒に続く稜線が既に冬山の杵相を
している。風はかきり強く寒さに震
えたら展望を樂しみ再び歩き出す。登
路は徒つて積雪も多くなり四人のピッ
クもぐつと落ちて来る。向もなく前岳
とおぼしき一つのピークを越すと又一
のピークが現われ、やゝ広い頂に前
山と書かれた石塔を見つけた。
左手に室剣岳の奇怪な岩峰がせり

立ち、右手に一きわ白い駒本峰がどつ
しりと控えている。目指す宮田小屋は
と見渡したが一向にそれらしいものは
なく一寸緊張したが稜線やいに微かな
トレースを見付けほつとする。半月形
に廻っている稜線を空腹と風に悩まされ
れ乍ら二十分余りも頑張ると、室剣岳
の一寸下に良くは分らないが小屋らし
いものを発見、元気がついてはおも近づ
くと四、五人の人影も認められ四時五十
分小屋に着く。赤穂を出発してから九
時間、小屋の戸はこわれており入口附
近には大分雪が吹きだまつている。驚
いた事に一歩中に入ると三十人位の登
山者がいて、わずかにこの入口の近く
が空いているに過ぎなかった。そこで
仕方なく雪を払つて寝床を作ったが、
戸がない上に屋根を通して夜空が覗
ぐやかに眺められには恐れ入った。

(竜江)

水二日(11月3日)

何度目かの復讐りを打ち、夢心地を
床を鳴らす靴音でさまされる。数百

街までの予定で三時起床、天候はど
うもはつきりしない。しばらく様子
を見る為には、朝食をとつてから又寝
袋にもぐり込む。満腹すると急に眼
むたくなる。六時半人声が目とさま
す。

七時、はつきりしない天候の中を
出発。眼前にそびえる室剣の岩尾根
が白と黒のコントラストで外国の雄
業當を思わせる美しさで続いている

三十センチ位ある雪が凍つて、時
々スリッパする。アイゼンを着けて
いるパーティもあつたが、雪の多い
岩場ではその為は大分時間をくつて
いた。二十分で頂上。下りに掛つて
も幾つかの岩峰を登つたり下りたり
、中にはザイルを取り出すパーティ
もあり、少少の高麗感を味い乍ら極
楽平に着く。

その名が示す通り、今迄の荒涼と
した岩場とは打つて変り、広々とし
た蘆松の気持の良い平地である。松

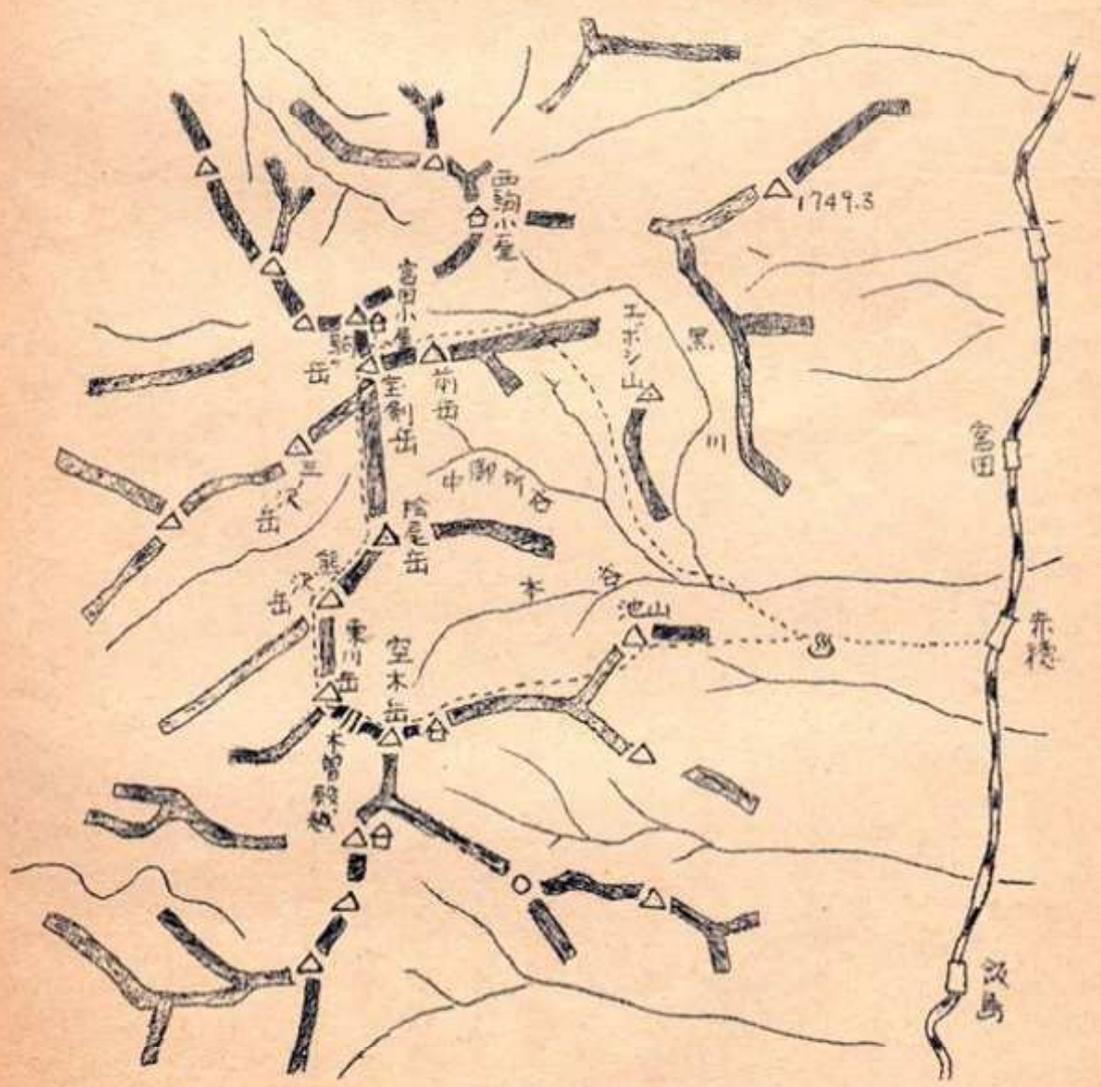
尾岳は三七一メートルの独沢岳の登り降りがあり、眼下には伊那川の源流が美しく、紅葉に色別された向いの三沢岳の峰を白い帯となつて流れている。

出発してから三時間半で松尾岳に着く。ここからは小さなピークの連続である。雪どけの路は歩きにくい。

東川岳に登ると、前方に今日越さねばならない空木岳がするどく威圧的に立ちだかつており、大分雪をかぶっているように見える。東川岳を下り切った最低鞍部が殿越小屋である。

水場はガレを五、六分降りたところ。今日始めてお目にかゝる水である。ゴニスにはしたり、コーヒートを滑かしたり、ともかく腹の中はごぼ／＼となり、これでは空木岳の三百米約九十分の最後の登りがもつかわうか。

ハテる事を覚悟でTさんに追い立てられるように出発。一足／＼足元を見つめ下ら高度を稼ぐ。巨大な岩石が現れ、ピーク登ると次才になだらかと登



中央アルプス概念図

り、最後の登りとなる。切り立った岩も懸松やウサリが手懸りとなり、かえって手足を使つて登る方が楽である。大きな岩畳を踏み越えしばらく行くと、殿越の鞍部から見た感じとは違つて、およそ平凡な形で空木岳山頂には小さな祠が一つある。

頂上から伊那則に三十分で空木小屋、殿越路を六十分で摺鉢小屋である。伊那則を十分程下ると赤屋根の空木小屋が沢合いに見える始める。もう少し雪が多いと小屋までスキーにはもつてこのスロープである。

空木小屋四時半着、水場は小屋のすぐ横手に流れがあり、十人は楽しくおぼろげな小屋を独占して今宵は快適な山小屋気分を味わう。後半天候は持ち直したが、出発が遅かつたのと日数に制限があり、又皆少々バテ気味なので残念であるが金山縦走はあきらめ明日はこゝから下山する事に決める。

才三日(11月4日)

空木小屋をバックに記念撮影を済ませ、八時五十分下山に向う。

せ、八時五十分下山に向う。

岳樺林をしばらく歩き、そして高木帯に入ると前方に南ア連峰を見渡せる。二、三の木々の独棟に着く。尾根は次第に平らで降路の左右に崩壊した壁が現われる。又この辺の針葉樹林の向から姿を見せる空剣が一段と美しい。

赤穂の所を下に見て下ると熊笹に覆われた池山に着く。こゝから湖葉樹林の山腹を小走りに下る。金山路は自動車道と交叉しながら近道を作つてい

約四十分、空木小屋から四時間の下りで駒ヶ根キャンプ場に到着。バスの時間を利用してニッ内也の温泉に入る。下界はまだ紅葉が盛りで、お湯の中から紅葉の葉を透して見た駒ヶ岳が素晴らしい。 (栗瀬)

コースタイム

才一日

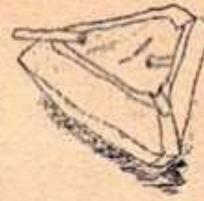
長野(四、五五)——赤穂(五、四〇)

才二日
七、四〇)——菅ノ台(八、二〇)——北御所
蛇腹(十一、〇〇)——清水平
(十二、〇五)——丁ヶ池(二、三〇)——
前岳(四、三〇)——宮田小屋(四、五〇)

才三日
宮田小屋(七、〇〇)——極楽平(七、
三〇)——松尾岳(九、三〇)——殿越小屋
——東川岳(十二、三〇)——空木岳
(十二、四一)——登食(二、一〇)——空木岳
(三、五一)——三、三〇)——空木小屋(四、
〇〇)



会の在り方



出席者

山縣昌彦
辻勝四郎
筒井満栄
吉野富子
齊藤良則
篠原健二
楠山正毅
岩井正江

司会 篠崎介二
記録 近藤澄江
十月九日 於山縣宅

司会 今までの会の動きを振り返つて見て山行計画の立て方、山話会の持ち方々の他どんな事でも気が付いた事がありましたらお話し下さい。まず若い人から齊藤君

今迄の山行

について如何ですか？

齊藤 僕は良くはわかりませんが、

山行面については今年は去年に比べると大方良くなって来ていると思います

司会 山行計画の立て方は今年の方が良くなって来ているか、又合宿など殆んど上から決めてやつて来ましたが、この点について

辻 合宿など基盤の出来上っている

採字クラブなら上から与えられて問題ないと思いますが、おしなべて技術が低い段階で平均化している我々の場合、もつと皆の意向でもって行くのが妥当の採に思いますが、又山行計画の中に女子の意向が反映していないという

桌で仲々御不満がおありの採ですか。(笑声)

司会 この点、筒井さん如何ですか？

筒井 そうですね、私は去年より今年の方が女子だけを考えても良かったと思います。合宿は或程度上から強制的に決めてもらった方が良くと思います

山縣 去年と今年の山行状態を考えてみると、去年は上からの基礎訓練が多く下の者の希望が聞かれなかった。そこで山行に限られたメンバーの固定化という問題も起きた採ですね。今年は旧人の希望を生かすという事で、結果は山行参加者の増加となって現われたのですが、どうもそうすると会の統一性とか目標がなくなる心配も出て来るといいます。司会 結局年間計画がないと山行に目標がなくなり、その場主義になつてしまふと言うことですね。

山縣 会の大きな目標の中で山行を

出し、これには会費が特に力を入れようにする。まあこれも今迄は無理

なかも知れないが、登っているう

に、目今連の目標を持つようになると

ますね。

司会 篠原君、さうだが話がむずかし

なつてガツカリしている様で、

(笑)

篠原 初めは会の様子も判らなかつ

たのですが、僕等はまた自分の希望で

なくよりも上の人に引張ってもらいた

と思ひます。

齊藤 しかしお互いに或程度山は知

っているのだから行きたい山ぐらひは

あるでしょう。

司会 いや篠原君の言うのは場所では

なく登山をやつて行く場合どんな課

を踏んで行つたら良いかと言う事が

多いと言うんだらう。

篠原 僕なんかまだ自分の行くべき

判らないです。

山縣 過程は向題だが、しかしそれ

がどの程度自分に合つか、そしてそれを

を如何にして自分に合せていくかとい

う事がむずかしいんじゃないかな。

司会 女子の方は如何ですか

筒井 一年目は会の様子が判らなかつ

たのですが、会の中で男女は離れて

いた様子がします。今年は女子の意

見がまとまりつゝあります。まだ男

の人に付いて行けるかどうか判らな

いですね。

辻 今の我々の会には引上げる層が

薄いんです。ピラミッドの先端みた

いなもんで上の首には若い連中の意向

が判らない。そこで仲々会としての方

針を立てられない。実際は上の首が合

意などを計画実行して見ても参加者が

少なかったりすると何か自分達のやつ

ている事が空回りしているんじゃない

かとやり切れなくもなつて来るんだ。

もうこの辺で我々としても皆の意欲と

が盛り上りが現われて来ると長い時期だ

と思つて下さいね。

がなかつたとして

これからの行方

について

辻 だから今述べた様に上から手

をるのではなくてこれからは下から

盛り上つてもらいたいと言う事だね。

齊藤 そうです。しかし下から

はどうも言いづらいですよ。(笑)

司会 篠原君、今年同期の人達と北

アに行つたのと谷川合宿に参加した

のとではどう違いますか?

篠原 同期の者同志より先輩が一

緒の方が頑張りが動きまますね。(笑)

それに同期の者と行くとリーダーが

決まらないうんです。それでお互いに

適当にやつてしまふんです。だけれど

先輩と一緒だと少し位の無理も効く

んです。

司会 女の人は、北アの女子会宿

で自信が付きましたか?

吉野 私は会に入つて一年しか立

つていないのです。前よりもつ

たように思ひます。が、男子のリー

カーが付けて欲しいと思つた事もありません。

辻 男子でもどうなんだけれど、女からみると希望を出して欲しいです。特に技術的な事、例えば女子に岩をやりたい希望があるのかどうかという事も判らないのですが

筒井 やりたい希望はあるんです。でも私の今迄の経験で例えば一の倉へ行きたいとは言い出せないんです。やはり基礎から女子の爲にでもやつて欲しいと思います。

司会 やはり基礎的な技術を中心と山行は上から場所を決められた方と下いわけですね。

筒井 え、丹沢の河魁と言われ、ついて行きます。

辻 その場合誰でもリーダーになるつもりで訓練を積まなくちゃいけないと思うね。たづついて行くと言うんじやあ合としても意味がないんで、これは会に入った以上当然の義務だろう。

司会 今迄の会の状態はこんなところですが、新しく入られた方何か？

岩井 まい山へ行きたくて会に入れたのでした。私は初めから教えていた方がいいと思つております。

楠山 僕も入ったばかりでこれからの事は何も言えません。希望としては計画を手立て欲しいと思います。それでその計画について行けなければ、その為のトレーニングは自分自身でやります。

辻 今迄の欠点として基礎技術の習得という事を認めても大抵の場合リーダーは実際の山に連れて行ってしまふんだ。これは指導層がお、むね暇がないという事にも起因するんだろうけど、それで余裕のある登り方をすればいいんだが、実際には登ることに皆せい一杯でさつぱり体系付けられた技術を習えない。だから技術を各人が反復的に習得する爲にも手近かなゲレンデ登山が必要なんだね。

司会 結局技術が問題なんですか。来年度の為に会報十号にアンケートも出す予定ですから今後の山行計画の資料になるだろうと思います。では今度は

当面の冬山

をどんな風にもつて行くかについて、**辻** まだ会としての一貫した基本的な方針は立てられないですね。

山縣 今年は基礎をじっくりやりたいと思うね。我会は冬山についてはまだ実績を上げていないので、あせると中間が抜けてしまう恐れがある。今年は会としての冬山は那須あたりから始めて一つに絞つた方がいいと思うね。来年あたりから少し発展させていったらね。

司会 皆さん冬山への意向は

斎藤 え、大いにやりたいです。

山縣 冬山でも残雪、初冬、厳冬と言うのが順序だが、山は下界とは大分株子が違うので仲々判断がけが

ない。そこで旧人的研究が必要にな
て来るが、これを金の中で主かして
欲しいんだ。そういう研究の意欲がほ
しいね。

辻 まあ冬山の経験は会員全体が少
ないで計画にも多少の無理があるか
知れないが、ある程度基本的なもの
の強制、例えばボツカ訓練などは必
ずですな。

山縣 今年は正月の合宿前に雪のあ
山に行つておきたい。又雪に慣れる
ためにスキーでも山に行きたいね。何し
てスキーはうまくなつてほしいよ。我
先でも良いから。

辻 我流はいけねえや (笑声)

司会 スキーを良くやる筒井さん如
くですか？

筒井 スキーをやり出している内に
がレンジでは満足出来ず、自然ツアー
的なものをやりたくありますね。

司会 話題を代えて

山話会

の向題なんですが、場所とか、日、時

向について

山縣 場所ですな。今迄の経験から
向題になるのは、

辻 場所は旧人宅でない市川食堂み
たいな処が遠慮がなくて良いのかも知
れないがどうも金が掛るね。やはり出
来れば自分達の固定したルームが欲し
くなるね。

司会 駅から近いという事も条件と
なつて来るし、場所は当分悩みの種で
すね。ではその向催日なんですか？

筒井 日曜日南催というのはどうで
しょう。

斎藤 今日には連休と合同山行にはさ
まれた日曜日だったので、誰も山へは
行かないだろうという事で南催したので
すが、どうも乗りが悪かったですね。

吉野 私は月に一回位は日曜日が良
いと思います。

筒井 日曜日に山へ行つたり、山へ
行かない日曜日に山話会に出たりでは
、日曜日に家をあける事になつて余り
良くないと思ひますので普通の日の方

が良いと思ひます。

司会 次に山話会の内容ですが、
最近研究発表を設ける様になりまし
たが、この点について

山縣 あ、言うやり方は良いね。
割当てるも皆を研究する様になるわ
司会 今迄の山話会は事務的な話
が多く、自由にしやべれる時間が
少なかった様ですが

辻 事務的な話題を早く処理する
という事は是非必要ですね。最近の
山話会が低調だと思われるのは、若
い人の意見が少いという処に原因し
ていると思ひますが、これからは事
務が話題を上手に引き出していくま
うにする事ですね。

司会 山縣さんの新らしい家では
さん太郎、有意義な意見を出して話
きまして有難うございました。
ではこの辺で、

◆アシケート

登りたい山

行きたい山

山 利尻岳

藤崎 介ニ

昨年中に登ってとう計画でしたが色々
で登れなかつたので、ぜひ行ってみたい
山、中に入っているのです。

ルートは一般的なところでも良いし、自
今このカで登れる処ならい、のです。特に
この場合は、後立山縦走の時の印象が
強かったので是非行って見たい。

南アルプス南部

斎藤 良則

私は山に登り始めてから今日まで、京
五杯の山に最大の魅力を感ずっています。

この原生林の山を思う存分歩いてみたい
です。それに今夏、南ア全山の所に



途中で事故の爲失敗しているのが尚更
なのです。

神沼 博

登りたい山、行きたい山はいくらでも

ある。日本中の(外国には行けそう
もないが出来ればヒマラマへ)、どの山
どの谷も二度でも三度でも、谷から尾
根へ、尾根から谷へと美しい造型物を、
上から下から探ってみたいと思ってい
る。特に一人ならば、奥秩父の山と谷
を歩いて見たい。時は秋が良い。荒
川を溯って国師岳へ、又金峯山へと、
日程にゆとりをもたせて登って見たい
ものである。数人ならば黒部川の深
谷美を探ってみたい。下廊下、十字峽

の辺に野営し、更に平を登って上廊下を溯り、
北アの桃涼境と聞く雪の平へ出て、二、三日登
寝をして浩然の気でも養いたいと思う。

又冬の北岳へも是非登ってみたい。今年
の三月に仙丈岳より眺めた時に、雪をいた
だいた突出した北岳のピラミッド型の姿が
印象によく残っている。

冬富士も登ってみたい山の一つ。十二月上旬
の果岳連の講習会の時、白銀の雪煙を吹く
富士の大きさに心ひかれた。この時は頂上直
下で引返したので、今度は頂上を踏まねばな
るまいと思っている。

村田 俊満

冬の東北 吾妻、安達太良

白銀の山肌と思えば、行分に二本のシユフル
を付け、そして豊富な湯量の温泉に没り
たい。

菅野 達世

冬の北アルプス

一度は登らねばならぬと思う

後立山

栗瀬 悦男

山の名前が気に入った。

甲斐駒ヶ岳

小杯 敏子

私の夢になりました。きつと現実には訪れる日を待ち下り。

辻 宏規

辻 勝四郎

去年の夏、仙丈岳に登った折、遺棄とつらなる山脈のうち、純白な花崗岩に覆われた駒ヶ岳の雄姿は未だにはつきりと頭に残っています。機会があったら登ってみたいと思つていたのですが、来年は見非登つて見ようと思ひます。五月の終り、残雪の間に高山植物が芽を出し始める頃に。

人の余り居ない山ならどんな山でも結構、皆さんと駆弁りながら山を歩くだけで満足なのです。

白馬岳

野田 靖子

四、五月頃の雪のある時登つてみたい。

斎藤 良大

冬の安達太良

丹沢(正として西丹沢中心)——岩場の基礎訓練(サイクルテイクニック等)をやりたい。谷川岳一の倉沢(五ルンゼ、一の沢、アルファールンゼ)

南アルプス南端(聖、光岳 ETC)にアルプス穂高連山(春)

筒井 満栄

冬の女峰山、雲竜峡谷

小ヒ見た写真で心をひかれて、先日、女峰に行く途中、峡谷から吹き上げる風に吹かれ、何時か登りたかと思ひました。

これは夢です。いつか女子だけで冬の北アに立つて見たい。それが夏の合宿から私クマ。

現に 力ある

石川 正子

初冬の金華山、丹波がき山、信州峰無之何時か歩いて見たいと思ひ下り仲まいかれな

い山の二つです。落葉を踏をり信州峰を歩いたら素晴らしいでしょう。

(一) 一の倉鳥帽子澤田壁

一の倉に於ける最大にして最悪のエボシ頂壁、一は私にとつても又登山をけ小はならなバルトである。

一の倉に入る時は何時も前穂テラスから首が痛くなる狂舞の続けは登高欲を燃やしたものだ。か来年もこの壁を目標とした一の倉通いが続けられる事だろう。

(二) 幽の沢中央壁

幽の沢右取右に斧で打ち切った杯に垂直に展開する巨壁。右取のリンネを登った折、その登はんの可能性を認めてからいろ／＼な方角から、この壁を偵察しては一人血を燃やしたものだ。後日それが中央壁と名付けられてベルニナ山岳会によつて既に登られている事を知った。谷川岳における最大の、我因に於いても有数なこの壁も登つて見たいというの二つである。

(三) 穂高屏風岩、同、奥又白、同、滝谷

(四) 剣岳西面

ピックスクライムそれが私の布いである。

近藤澄江

する印象が余リにも強いからです。

星野光基

南アルプス縦走

小生は南アルプスに未だ一度も登つていない為、むも未だも忙がしくなりそうですので行けどうもないのですが。

大武昭雄

地球上にあるありとあらゆる山一

高くても低くてもどこにはそれれぐの精味があり、葉しみがあると思ふので、強いてしほれば夢はマツター

ホルンにヒマラヤに、実現可能を登

りたい山は一寸ゆびしくなるけれど

(1) 神流川周辺の沢と山々、特に神

流川の完全湖行。

(2) 両神山に通じるありとあらゆる

ルート。

岩井正江

雪の不帰岳

山に対しておめようとするもの、

求められるものが同じだとすれば、

山に未経験な私にはどれも終局に於

いては同じかも知れないが、行ったことな

いこの山に惹かれるのはむしろその名前のニ

ユアンズによるのだろうか。不帰岳。そん

な言葉を繰返して居るうちに雪の甲をみたす

らに歩み続ける小さな姿が無精にいじらしく

奥日光太郎山

下界の紅葉も終りを告げようとする

る昨年の或る日、風凩登山の折わづ

かの時間を一緒に過した知人から便

りが届いた。……10月16日東武の山

岳夜行とやらで、奥日光太郎山に着き

ました。白樺の林に反照する紅葉の

中を美しさの為にうつとりとすませて

下山の途中カレ場に転落し手腕をな

どを添手に擦りむいて帰りました……

……

これら読んてこの手紙の主と未だ

奥日光太郎山の紅葉を交互に考えてい

る内に私が今まで見たこともない紅

葉のように思われた。通勤の車窓か

ら見える雑木林の紅葉を見乍らふと

これを出して、もう来年までおわ

かけという秋の奥日光太郎山を迷ひ

出しました。

奇蘇 勲

剣岳

この夏の後立山縦走の時、剣岳に對

篠原健二

(一) 日高山脈 幌尻岳、ペテカリ岳

(二) 飯豊山、大日岳、三回岳

(三) 鳥海山

(四) 奥日光の澤(小川谷ETC)

(五) 谷川岳一の倉(四ルンゼ、南稜、二の沢石段)

最近の山の混み方にうんざりして、いますぐでやはり人気の少ない東北の山々に心惹かれま

山縣昌彦

いっかにはヒマラヤへも行きたいのだが、ま

と身近な処で……。(但し冬山は冬過ぎて遊

に困るので省きます。)

(一) 武尊山

昨年から行くつもりで三回行き損った因縁

付きの山。一回は当然、天気予報の
二回目は大宮駅で列車満員で乗
水、三回目は出発前に出来た用事
のため。

冬期以外なら川場口の行小屋を判
用して一日半で藤原へ抜きたい。

(三) 湯掛川池返り沢

大倉澤まではやつたが一つ残つて
しまった。やはり心残りがする。

(三) 守門岳

谷物を調べて見たい。未だ殆んど
紹介されていないから。

後立山連峯

前に計画しました果さず、今一度
寝返してみよう思っています。

(一) 安達太良山

(二) 南会津・朝日岳

(三) ハチ岳(初冬の)

厳冬期の後立山

限られた人生に於いて登りたい山

亀江資之

宇近山(家の裏山とも言える)
県内の山。杖父。を歩いて見たいと
思うオモ禱土の山として何となく親
しむる感じさせるからです。

田中幸一

その方法は縦走の形でも良く、ニ
つ三つの峠越えでも良いのです。例
えバリエーションでなくとも合同山
行の折にでも一度は行って見たい所
の一つです。

関口陽子

ハチ岳

長井 宏子

杖父(奥杖父)

吉野 富子

富士冬山技術

講修會参加報告

篠原 健二

十二月五日から三日間、冬富士に於
いて埼玉県教育委員会及び県山岳連盟
の主催による冬山技術講修會が開かれ
ました。今回の講修の対象は各山岳会
のリーダー級と言う事でした。

前夜新宿発にて富士吉田着十一時、こ
こで予定通り佐藤吉治氏宅に仮泊。翌朝
履むけまなこでトラックに分乗、馬返し
に向う。雪一つない星空に、富士のシル
エットが浮んでいる。馬返しに着く頃よ
うやく富士も真っ白い肌を見せて来る。
此処でパーティを編成、だら／＼の林
道を肩の荷にあえぎ下り船泊地佐藤小屋
に向う。小屋に荷を置くと直ちに雪上訓
練に入る。あれ程日かつた富士も近ずい

。合岡山行。

妙義山

高倉良輔

(日) 11月24日 晴

(M.F.M) 菅野、山泉、神沼、筒井、吉野

辻(勝)辻(鬼)、田中(重)、小林

百川、楠山、長井、藤原、高倉

午前三時五十分松井田取に降り出のまゝみると、日世日の為か予想外に登山者が居た。懐中電灯を頼りに碓氷川を渡り高道を左へくゞと進み、やがて妙義神社の境内に看く。小林止の彼處内の石手の道より登りにかゝる。

少々徑を間違えたならしく、落葉を散り敷したガレの急傾斜を登ると、とび出したところが縦走路の稜線であつた。その頂頭目も東方の山上に顔を出し今日の好天を約束してゐる。

大い字山を右手に見る處で待望

の朝食にありつく。

休憩三十分後、前方の妙義

連山を眺めつ、大い字山を捲

き気味に迷ひやがて白雲山直

下に着く。こゝから徑を左手

にヒリ松井田の町を眼下に見

下す少マスリルを感じるトラバース

突き全負無事通過、そこからあつて

なく白雲山頂上に着く。

快晴の為、あたり一面の眺望が良

く初ぎ、今迄のけだるさを忘れさせ

て呉れる。こゝで噴煙二五〇〇川に

及ぶ浅向の爆発を見る事が出来たの

は数多い山行の中でも珍らしいこと

である。

こゝからは天狗に向う。やがて白

雲山の犬岩壁を左手に見乍ら天狗の

頂上に着く。頂上より菅野リイが

を矢頭にして勇しい女子隊が左手の

急傾斜を降つていつたが徑を行詰り

引返して来た。御苦勞存。

右手の徑を捲き気味に降り、又天

狗の登りと同様に傾斜を登り、やが

て見るとあちこちに火山岩が露出し、又風に吹きとぼされるため積雪も四五十程程である。

七合五ウに於いて、アイピンの有無の

場合の斜登降、直登降、トラバース及滑

落停止の練習を三時半までやり一日の

講習を終了。

寢床前一时间ほど畜場氏の冬山カ心

がまえの講義があつた。

二日目 登頂の日である。この登頂と

う事には事前に講師斎藤清太郎氏(東

京師岳連選対委員長)から話しがあり、

あくまでもケレンデを延長したところ

の登頂に過ぎない、と言う事である。

小屋よりアイピンを付けて出発、頂上

付近は雪煙が舞上り相当に月も強い。昨

日の練習場を過ぎるころより勾配も一段

と強くなり、時折富士特有の突風に見舞

れ出した。

九合目付近から左手の尾根にトラバース

スを始めるとより月は俄かに強くなり、

同連三十メートル余の突風にあらわら

二 相馬岳に着いて振り返って見ると

と代々が向遠々降った火は、あ

らモアイグーの北壁を思わせる

松を絶壁だったのはおどろいた

長く事なきを得たというところ

頂上より秋又連山を眺め、南ア

ハ、岳等を一年に見渡せた。この

には一同御満腹と見えて「あれが

北岳、むこうが赤岳」等と盛んで

ある。

その頃、先に噴火した浅向の灰

が粉雪の杯にちり／＼と降って来

た。そろ／＼昼飯のことを気にし

ながら、だら／＼坂の登降をくり

返しホツキリ峠に出る。日当りの

長い草地に円座を組んで待望の昼

食、皆せむのホツキリ峠がヒカホ

ラのま今やおとしと待ろこが小る

の境。

感動はこれからだと聞き、少々

の茶を金洞山への登りにかゝり

トリノターの荷を借りて刃渡り

上げられる杯を処や、高度感のあ

る一寸とした悪場を登る。

何時の向にか金洞山を通過して、

この山行中一番の悪場におつかう。

音息停りがカイルを忘れて来た為、

こゝでは他カパーテイの親切な計り

でカイルを借り懸壁で下降したが、

思ったより悪いところであった。こ

こで予想外な時間をくってしまつた

が、その中でも全員無事に中岳に至る

。こゝからはもう登りはなく、四オ

の奇岩に目をやり乍らも、日没を気

にして誰の足も早くなる。

途中よりバリーターの案により20

円のバス代を訓練という事で節約

、広いバス道を降るような雨天の星

空を眺め乍ら松井田駅へと向つた。

コースタイム

大雪(0.43) ↓ 松井田(3.50) ↓

白雲山(7.50) ↓ 金洞山(1.30)

↓ 松井田(7.00)

思ひすピツケルのシマフトにしがみつ

。いよ／＼尾根にどび出す頃より斜面は

アイスバーンになり、アイゼンのさしむ

音が無意味になって来る。この時前を歩

いていたM山岳会の人々が足を滑らし、ア

ツクと言う向に見えなくなつた。

幸い三十メートル程で止まりカミノ

登つて来たが、続いて又一人が滑落、リ

ーが百藤氏も「これでは」と思ったのが

こゝで登頂をいさぎよく抛棄、我々も「

此処まで来れば登つたも同然」という言

葉に慰められ小で下山についた。頂上直下

百米の地奥である。

才三日目 小屋から一時間程の斜面で

カイルによる滑落停止及確保の練習。

(メモ)

・参加者一計四十三名 浦和市岳連か

ら茨枝(柿沼博、棟原) 谷本(後藤

、野崎氏)の四名が参加。

・最後は今回の杯を意義のある講習会を

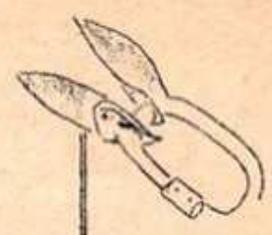
強引に推進された県岳連関係者に感謝

したい。

山行報告

幽の沢一ルソゼ

柿沼博



日一九月七日
メンバー 辻勝四郎、柿沼博

「幽の沢」という名前に私は何か静かな深遠さを感じていた。白も門に登り、初めて此の沢を眺めた時、一の倉の陰険さに比べて幽の沢の明るい落とした感じに何時かは登って見たい沢だと思っていた。

ジの足跡が良く乾いた岩肌に見えたと印さ小て行く。ワラジの感触が実に心地良い。我々二人の外は全たく人影もなく静かな楽しい沢歩きと言った所。谷川岳にもこんな静かなところがあるのかと疑いたくなる。

しばらくはゆるいスラム状の沢を道み三十米程の滝を左手にからんで越える。沢巾も広さを増して来る。二股附近に達する頃は強い陽差しにジツトリと汗ばんで、ホツと一息付いて見上げると行手には石段、左側の岩壁がスツと迫って立はなかり急に緊張感が漲る。『さあ楽しい沢歩き所ではないぞ』と思ひながら左股に入る。スラスもずつと傾斜と大きさを増し、水音も一さば高くなる。二の米の滝を石手から入るで落口に出ると息付く暇もなく小滝と漸の連続である。水に時々喉をうるはしてはぐん／＼と登って行くと沢は益

益向けて左股の胸壁の全貌が眼前に展開し、真正面には滝沢の大滝が見上かるばかりの高さから何百米もの白い一筋の布を掛けて見事な景観を呈している。何時もカメラを持って谷川岳へ来ると雨に降られるので今日は持つて来なかった事が残念である。目指すオールンピが滝沢の左に輝く切水込を一直線に突き上げていくのがほつきりと見えて来る。大滝直下よりオールンピの入口までは岩肌が節理をはつきりと示して深々えぐれ、前はつた岩が階段状に続き、陽を受けて白く光る石英は、巨大な宮殿の豪華な急階段を登っているように一寸気持ちが良い。

オールンピ入口到着、ここは広々としたテラスを形成し膝を下して白も門方面を眺めるのに好都合な処だ。

殆んど休まずに登りつめたので大分汗をかいた。始めて一眠する。雲が頭上より白も門方面に決り帯めた。

今道狭嶋がった空模様も少し怪しく
なつて来たので、腰を上げてオーの滝
取り附る。大きなチヨツクストーン
に這上りて左壁からこの滝を越すとすぐ
F2である。二十五米ほどもあるう
ナムニール状のルンビの右側は垂直な
壁で取り付きようもない。

丁さんがカイル、三つ道具をサック
より取り出し、僕もハンマー、カラビ
ナ等を与えられて腰に下げる。丁さん
トツツで登り始めた。カイルがスル
ツルと伸びていく。滝の落口も直下が
滑りやすく、ホールド、スタンスを求
めて動かない。今日も丁さんは風邪気
味で調子が悪いと云つていたが、下で
見ていると仲々慎重である。

天陽はすつかり雲におもわれかけっ
てしまつて汗が冷えて来た。と丁さん
の身体がすつとろし上つて落口の隙に
滑れた。カイルがスル／＼と伸びてい
く。うまく上れたようだ。カイルは一
瞬た。何時も乍らの丁さんの確保に僕
は安心して登る。なる程、落口附近は

少しカフリ気味で悪い。左足を大きく
上げて一気にのし上ると上のテラスで
丁さんの確保している筈が目に入った。
笑顔でお礼を言つてすぐF3の直登
に掛る。十五米位であらう。丁さんが
左側をからんで登る。上部は草付で相
当わるいらしく、ハンマでステップを
作つて右側の落口にトラバースして姿
が消えると向もなく声がした。丁さん
の確保を信頼して滝の中をカイレクト
に登る。上部はナムニールになつていて
サックがつかえて少し具合が悪かつた。

F4、F5は何れも五米位で難なく越
すと、続くF6である。滝の連続だが
一つ／＼が安定したテラスを持つてお
り、ルンビが深く凹み込んでいるので
両側の垂直な壁に視野がさえぎられて
高度感がないので気分的に楽である。
F6を登る頃よりボツ／＼と雨が落ち
て来た。振り返ると狭いルンビから見
える白も白山方面も一面がスに包まれ
てしまつてさつきまでの快晴はウソの
様に陰翳を称せとなつてしまった。F

6を越すとルンビは二本に分れ、左
は狭く細々とした水流を持つたルン
ビで、右はやや開けて草付混りのル
ンビである。雨が少し強くなつて気
温が急に下つて来たので、水量の多
い右側を登る。所々草付を交えてい
やな急斜面だ。やつと二人を入れる
位の岩陰を見付けて雨を避けること
にする。この岩陰とても不安定な
のでハーケンを打つてカイルで身体を
確保してから小休とする。

休むと急に寒さが身に沁みてガッ
カタふるえて来る。ガスに包まれて
視野が全たく効かず上の見通しが皆
無となると不安がおそつて来た。

「これは困りましたな」と言いつら
む丁さんは悠然とタバコを吸い始め
た。僕もワインドヤツケを着て寒さ
にふるえ乍らタバコに火を付けて落
着くことにする。腹もへつて来たの
でサックを開けて腹ごしらえをする
。雨は一向に止みそうもなく、同さ
之出て益々気温は下る。谷川岳の気

温が急に下つて来たので、水量の多
い右側を登る。所々草付を交えてい
やな急斜面だ。やつと二人を入れる
位の岩陰を見付けて雨を避けること
にする。この岩陰とても不安定な
のでハーケンを打つてカイルで身体を
確保してから小休とする。

家の変化の激しさは全たく甚しい。雨の小止みになつたのを杖に又登り始める事にする。見上げることが又の視界の消えるあたりまでずつと急な草付が続いている。スリッパしたら終りだ。アサイレンしたまゝ登る。

急な草付が相当長く続きブッシュと下半身はすつかり濡れてしまつた。高木をまよめて掴んではよじ登る。は相當なアルバイトである。フツシを出てからはアイルをはずして進む。やがてポツカリと奥壁ルンゼとの中間リツジにとび出た。こゝで奥壁ルンゼの中に入つて登る。

ルンゼには水量が未だ相当にあるので足掻きまでは一寸ありそうだが。何しろカスで見通しが効かないので心細い。ルンゼに沿つてしばらく登るとカスの彼方にかすかに後線らしき線が浮び上つたので元氣を出してピツチを早めて登ると、又その向うに後線らしきものが見えて来てかつかり。しかし何れに

しても後線遠からじの安心感を得て木ツとする。

それから後線までの何と長く感じた手か。ルンゼが終わって草付となり、やつと熊笹地帯に着いた時は嬉しかった。こゝで地下足袋に履き替えて、一の倉岳特有の熊笹地帯を風とカスに小る。と乍ら泳ぐようにかき分け、進んで行つたら、ガスの中にボーツと人影が一ツ浮び出た。近づいて見たら、どこが一の倉岳の頂上だった。

—完—

ヘコース・タイム
土合(五、五五)——幽の沢出合(七、〇〇)
(七、三五)——オーレンゼ入口(九十五)——F6上の二股(十一、〇〇)——熊笹地帯取付(二、〇〇)——一の倉岳(三、〇〇)——(三、一五)——トマの耳(四、〇〇)
(注) 隣谷の一の倉岳が異常な程の賑わいを呈している現在でも、幽の沢は人影を認めない程に静かである。アフロト

チが長いと言う事も原因の一つかも知れないが、右腕はいさ知らず生谷からも望見出来る如く、左腕は岩場割に意外な程に藪が長いと言う事が一の倉岳に登山者を迎えない原因の様である。ルンゼに付いて言えは、手実上の岩場は取付からF6までであつて、これは一の倉岳への行程の殆りも当らない。右腕の岩場の隙に大いに期待して入つたのであるが、実際には一の倉の四ルンゼ程の登攀しか味をなかつた。

左腕では二股から各ルンゼ取付までの流場、スラブの登はんはむしろ興味があり、こゝは右腕カールホーテンと共に新人練習の場として恰好なところであらう。

奥壁ルンゼは右前の懸念のなかに反し愈弱なルンゼである。いづれにせよ幽の沢左腕は、あらかじの強勁なスリッパを掛ける気持を持って、峠らなると幻滅を味うのではなかつたと思う。(丁)

茅ヶ岳

近藤 澄江

九月十四日

のくくりと休む暇もないうちに汽車

は三崎駅に着いた。さすがに三崎駅で

ある駅の待合室は登山者で一杯であつ

た。余り良く調べないままに出掛けて

来た山行の爲に、いざ駅を降りたもの

へ行き先を考へてしまつた。駅前から

近い道路を真直ぐに歩いて行くと左右

に折れる広い通りに出て、さてと又首

を傾けた。わきを通り掛つた新向配達

の人に尋ねると、首をかしげて答は得

られなかつた。

再び駅に戻り駅前のバス案内所で道

をたずね、ようやく茅ヶ岳へのオ一歩

が始まつたのである。初めに辿つた道

とは全たく正反対の方向に歩み出し下

ら三人は顔を見合せて苦笑した。ペ、ペ、

り歩いて行くと真直ぐに南アの峯々が
雲の中から頂をのぞかせていた。遠く
ハツの連峯と何時も見慣れた山々では
あつたが、そこには何か新しい感激に
も似たフアイトを与えてくれるものが
あつた。
なだらかな斜面にひろがる桑畑には
もう大きなかごを持つて葉を採る姿が
あつた。いくつかの小さを南畑部落の
一軒でこれから先の道を尋ねると、「
良く来ましたね」と古い乍ら親切に放
之てくれた。そして取り立てのトマト
を六つ分けてくれた。このトマトが今
日の三人の山行きにごんごんに良い食糧
の一端を担つたかは言うまでもなかつ
た。

此処でゆつくり休憩をした。こゝ
から尾根に出る徑に入る。徑は急に
なりあまり踏んでいない荒れた徑を
踏み分けて登つて行つた。ひよっこ
り飛び出した投線に立つと下の方か
ら山人の木を切り倒す音があたりつ
つ静かさを破つていた。そのまゝ真直
ぐ尾根徑を辿るとやがて茅ヶ岳の小
さな頂が我々を待つていた。
頂上からはうつすらと雲のかゝつ
た奥秩父連峯、ハヶ岳、南アヶ岳が
わすかにのぞかれる中で三人は思い
思いの感激を胸にまわりの眺望を見
て居た時、「マホー」と呼ぶ声がか
方に目をやると、前方の金ヶ岳を先
客が登つていく。我々の到着に気が
付いたのであろうか、今迄前後に入
一人居ないと思つていたこの山に初
めて登山者姿を見た。彼等の姿が
金ヶ岳から消えてしまふと三人だけ
この山を満喫しようとする。時間をたつぷ
りとつてお茶を飲む。お茶を飲むのはなほ
いたく不食事をすする。

そのく、整理にとりかゝろうとした
 時目の前にひよこり鞭をぶした登山
 者、見ると両腕にペラこさで停った傷
 痕があり、訊くところにもると途中松
 を間違えて尾根にとり付きたまへ上
 へと歩いて来たところのことであつた。我
 が作つた紅茶を差し遣すと、其の

彼は一頁に飲み乾してしまつた。
 今朝読いた誌に地図を照らし合せ
 下り下山に向つた。登つて来た地獄の
 尾根をいかに下つていった。途中時々
 松が崩れて石や木の木の向をかま
 合はてたつた。先頭は立つた木の根に
 ぐまの草が引掛つて何度も傾をこすつ



秩父日記

大武昭雄

最近の会報を見て真先に感じるこ
 ば「ちましよめやつてるな」とい
 ことでした。そして俺という男が致々
 小こくなつてしまふような気がしてと
 ても寂しくなりました。記録に見る山
 々、秩父の山々中深く入り込んでしま
 った僕にはそれらの山々、峯々にはる
 が遠くに行つてしまつたような感じて

す。四月に当地に来て八ヶ月歩くこと
 だけは続けて来ました。仲間達比較
 べ小ぼほんのトレイニク程度登山歩
 きばかり、小念犬での半年向の山歩
 ちレポートでも送らうと思つていたの
 ですがそれさえも仲々手が着きません
 。これはレポートに代えて日記から書
 き抜いた簡単な報告です。

た。山道に置き忘れた来た跡の
 らのしかなかった。曇天の空からわすか
 にも小る薄日を見たよりに方向を判断
 し、マフをこくごつて下るうちはやが
 て怪しい径に出てホツと一安心
 小休止をこつて沢の水を口に入水に
 せよ。そのころ下るともうトラツク
 の道いさうな道になり、山の子
 供が遊んでいた。もう上草沢の部落
 が遠くそこにあつた。
 上草沢の部落まで下るとバス終
 電があつた。待合所のそばに小ぢな
 茶屋で休みながら予定していた昇仙峡
 行きを前念した。向もなくバスは代
 マの外に部落の人達を乗せて谷向
 の道を甲府へ向つた。
 ヘコステイム
 新倉(0.10)―草崎(4.30)―仲小之島
 (7.00)―古森(8.00)―9.30―せま
 出合(9.30)―せ岩(10.00)―10.15
 一草ヶ岳(11.45)―13.10―上草沢(15.30)
 一上福沢バス(16.05)―甲府(16.50)

▼四月 赤岩(約千六〇米)と言う部落の北に立つ山の岩壁を眺め乍らあの南壁を直登出来たらなあと思つた。だけけで出歩るくヒマなし。

▼五月四日—小倉沢(中津川の支流の神流川にそぐ沢)備察、友人と二人入口が小さいので馬鹿にして入つたらその小ところは広く、あちこの沢に入るとその殆んどが石灰岩の絶壁にさえぎられてしまふ。傾へマフをこいだり、沢を下つたり一日中さまよいゆく。

▼五月十三、四日—八丁峠へ遠足及びその下校分。峠を下にくぐると正面に二子山という石灰岩の山が見え、西北方には雲のかたはにかすかに浅間が見える。

▼六月三日—二子山へ小中学校山岳部員と、例の八丁峠を越えて坂本まで下りそこから二子山へか登りヒなる。取峠で部員と別れマフをこいで頂上へ。(この南壁は最近岩場として知られるようになった) 帰路、農村を知らないう等は路傍に乾された小麦、大麦に目を見集る。

▼七月八日—両神越え(浦和での研究会へ出席するの道路又環ヶ島バス不通により)。小雨をついて驟を出る。例の八丁峠へ出てそこから石へ両神の尾根を進む。東岳、西岳を至て剣ヶ峯で昼食。

あえび行く岩根すれ、石燕、日向大谷、楢尾澤峠を至て納宮へ。夜はバスで秩父へ出る。

▼八月六、七日—両神行、併地教育研究会で両神村の分校へ。六日夜清滝小屋泊。七日両神山頂、県庁以来三度目の両神登山も展望よし。

▼八月二十日—例の八丁峠へ浦和から来た友人八名を送りに行く。

▼八月九日—二瀬ダム見学(夏休み中)。ここへもつれて行つてもらえないう子十八人ばかりヒ。

楢尾澤峠という峠を至て物本に出、奥秩父への登山口にしよの信州、甲州への分岐点である川又まで足をあはし、同夜は二瀬ダムサイトの現場に泊る。

▼八月二〇日—前日に続いてダム工事現場見学の夜。三峰山に登る。

▼八月三〇日—待望の赤岩に登る。ただし南壁にあらず。赤岩峠からの尾根径なり。同行は中学生約十名。山頂まで約一時間半。南側は埼玉県、北側は群馬県、日傍、サルオゴヒなど澤山ある。山頂附近で岩首とりに共する。

▼九月十四日—雁掛沢を探る。五万分の一の地図にはれつきとした……があるのに踏跡がなからず、加えて霧深く見通し効かず途中であきらめて帰る。同行は小学五年生二人。

▼九月二十日—八丁峠の途中まで雨中の散歩。

▼九月二十七日—八丁峠で月見の宴。▼九月二十八日—雁掛沢—雁掛峠(二七六米)—赤岩峠—赤岩

誕生日を記念しての山歩き。友人と二人。水筒、モシツなどの樹林がすばらしい。赤岩峠から西側の壁を登る。岩がもろく手を掛けるとボク／＼にかけるのはいさ／＼かへい／＼。岩の向に

生える木をポールドにしてよじ登る。
この頂からのどが痛み出し、いさゝか熱
っぽくなる。予定していた尾根位に
さき山頂から八丁峠に下るルートを断
念して下山。

九日二九、三〇、一日——病気で伏す。
痛む吾にあけび持ち来る。

子等のあり

十月二二、二三日——四度目の両神登山
オ一日相変わらず霧深く展望ならず。
霧深き両神小屋に友となり、である
オ二日川口の友人二名と合流して滝
屋より再び両神山に登る。五度目に
てようやく快晴に豊まれる。紅葉も
た。前日清境小屋の近くでカ
ーミと言うキノコを採り油でいたの
正油で煮て食べる。美味なり。

十月二十九日——ケヤマ沢旅行（仮称ハ
崎へ登る途中にある）中学生三名と
中で岩草など採り乍ら旧八丁峠の露
の上で

紅葉の両神山に登る月
岩にねる我が上走る秋の蜘蛛

十月二十二、二十三日——紅葉刈及びその
下検分に学校の西側の山へ登る。

十月二十六日——赤岩峠越え。こゝへ
来て初めて峠を越えて群馬県に下る。
台風で荒された澤沿いの径を一人歩く
。それでも滝も多く三十分も下ると紅
葉も見頃の結構らしい。

十一月一日——八丁峠越え（台風後バ

ス不通のため八丁峠をこゝ坂本へ出
るとこからトラップで秋又へ出て帰車）

十一月三日——山への帰路、三峯口よ
り落合までバス利用。あとは悪友と二
人中津沢谷をテクツタテ紅葉を樂しみ
同夜中双里の仙崎亭泊

十一月四日——六・三〇の仙崎亭出発。朝
日を受けた谷向のもみじを樂しみ乍ら
学校までテクル。

十一月十六日——十五日夜半の初雪で山
は真白。

子供（五年生）二人を連れ近くの
尾根歩き。マアミとく枝から落ちる雪
で三人ともびつしより。尾根で一時回
も焚火をして暖をとる予定コースの中

ほど前進をあきらめて帰る。
初雪のマアミをくゞりて
子等と登る



会務



報告

十月二日…山話会 於辻宅

出席者…辻宅、山縣、吉田、藤崎、龜江、村田、筒井、近藤、吉野、小林(計十名)

一 映画会開催の件

十月八日…山話会 於辻宅

出席者…辻宅、山縣、田中、吉田、藤崎、近藤、齊藤、長天、齊藤、長則、村田、田中、長、亀江、高須、藤原、小林(計十四名)

一 山岳映画会の件(役員選出)

会場…辻宅、村田、小林、齊藤、長則

受付…吉田、藤崎

一 沼和山岳連盟選出結果発表の件

十月十六日…映画会 於埼玉会館 午後六時より

出席者…山縣、辻宅、藤原、吉田、菅野、田中、藤崎、筒井、吉野、近藤、山崎、龜江、齊藤、長天、村田、齊藤、長則、草野、藤原、流、沢、齊藤、高須、小林、野田(計二十名)

十月二十三日…山話会 於市川食堂

出席者…山縣、辻宅、藤原、吉田、菅野、田中、藤崎、筒井、吉野、近藤、山崎、龜江、齊藤、長天、村田、齊藤、長則、草野、藤原、流、沢、齊藤、高須、小林、野田(計二十名)

一 新入会員紹介

関口陽子 蕨市五福二の五〇三二

岩井正江 大宮市浅間町一〇二二二

桐山正毅 浦和市前地一七二

高倉衣輔 浦和市大田区若木町

長井宏子 浦和市元町一〇一五五

石川正子

二 会の運営について

十月九日…山話会 於母校会議室

出席者…山縣、辻宅、筒井、吉野、辻宅、近藤、齊藤、長天、齊藤、長則、藤原、小林、桐山、石川、吉野

一 冬期合宿立案(那須、武尊、甲斐)

十一月二十四日…山話会 於市川食堂

出席者…山縣、辻宅、辻宅、菅野、田中、藤崎、筒井、近藤、龜江、田中、桐山高倉、齊藤、長則、星野、藤原、齊藤、小林、長井(計十八名)

一 冬山合宿 上州武尊山に決定

一 冬山合宿準備員…辻宅、桐山

一 合同山行の反省 基中技術の再検討

十一月十一日…役員会 於辻宅

出席者…辻宅、山縣、辻宅、藤崎、筒井、村田、藤原(桐山、齊藤、長則)

一 武尊山の検討

一 購入装備について

十二月二十日…冬山打合せ会兼忘年会

出席者…山縣、辻宅、辻宅、吉田、菅野、藤崎、山崎、龜江、村田、齊藤、長則、栗原、藤原、桐山、筒井、吉野、近藤、小林、野田、関口、若井、長井

一 冬山合宿地 上州武尊山

一 合宿期日 十二月二十六日(一月五日)

一 合宿バス 上野原山から

尚、合宿中は母校山岳部との合同

冬山合宿打合せの後、本年最後の集金会である為、忘年会(移る) 於母校会議室

(以上、十月から十二月迄の集金報告)

山行の折には、(個人山行も含む)その期日、予定コース等あらかじめ事務所迄必ずお知らせ下さい。

— 遊覧対策係

購入装備

- アイスバイル、カラビナ、アイスハーケン、ビレーザイル、コックヘル、バケツ、ランタン、マット(エア)、ザイル(三〇M)

購入予定

- テント(費用一三張)
- ザイル(三〇M—一キ)

装備係

現在、会の運営上支障をきたしてまいりますので、会費は毎月遅滞なくお納め下さい。

会計係

縣体登山大会雜感



昭和三十三年度県体登山は今年度県体連本部の所在地である飯能岳連の御一助により、飯能を起卓としAコース(奥秩父長沢背稜)Bコース(奥秩父山回山稜)の二手に分れて十月四五・六日の三日向に互り行なわれた。

浦和市岳連に於いては折悪しく各山会ともそれ／＼都合が付かず、一名参加希望者が無いという状態だった。せめて何かのお役に立てばと思いが役員としてBコースの方に参加し来た。浦和にもいっかは県体連の当が回つて来るわけでもあり、この際いろいろ／＼と感じた事を含めて報告するにしよう。

オーにはコースと日程の組み方であるが、人によってぼつまらなルート(マ

マア山のコース)だという意見もある

うが、私は此のコースを送る飯能岳

連の意欲を認めたい。県内には、という

制約がある以上マア山は止むを得ない

ものであり、従つて殆んど山がボロ

ユラーなハイジャンクコースとなつてい

る現在、体力、技術に相当な向きのあ

る広い層の人々に参加させ、而も安直

なりフリーエーションに墮さないコース

を送るということには至難の業である。

その点今回のコースは初心者向きのB

コースでも或程度の距離と俗化してい

ない山の気があり、Aコースは幕営装

備一切持参で一般には知られていない

という山男向きのコースが選ばれたの

は適切である。而も向コースとも地元

山岳会の人々により長期に亘る踏査と

コースの作り開きが行なわれた。奥、今迄の県体登山にはない苦労があつたと緊せられ敬服する。

次に日程だが、両コースともオー

日夕方までに飯能市内に入り宿舎に

一泊せねばならないと言ふのは、今

度のコースでは止むを得なかつたが

宿泊料五百円は痛いという者も居た

のではなからうか。然し昨年の両神

山の時も今回も此のやり方だからこ

その前夜祭が持たれて県体らしい気分

にもなり、又地元の協力が得られる

のだとすれば止むを得ないかも知小

ない。たゞ明日は今迄の例から見て

少し早らせた方が良さうに思う。

県体連登山は全たく例外なく降られ

ている。今回も又しかり、特に幕営

して二日向に亘るAコースは大変だ

つたらしい。Bコースでも最初の全

比叡山の登りで既に女性(高校生)

が二名ばかり落伍し、更に途中男性

(一人前の)でも落伍者が出た。こ

の点飯能岳連の最初の県体連りAコ

コース一本でやるより（自信のない者は加いなかかったかも知れないが）より容易なBコースとの二本立てにしていただいたのは良かったと思う。

オニに地元の態勢であるが、前にも述べたようにコースの選定とその整備が最も大変だったらしい。その他宿舎交通関係の手配、資金の捻出、受付案内、引率等々、私の見聞した限りは地元飯能岳連の人々（勿論県岳連に賛の協力もあるが）は良く協力し運んでくれた。山が地元だけにやり易いのは確かだが、岳連会長の中村由蔵氏（元飯能高校の校長であり、山に理解のある活動的な会長を持って幸いである。我々浦和岳連としても将来に備えて益々協力を態勢を回めていきたいもの）である。

オニに参加者の態度、年々良くなつてはいるようだが未だ十分ではない。山の層の人達が参加する以上完全な山モラル（宿舎に於ける態度行動を合め）を望むのは無理だとしても、そ



れ故にこそ一戸役員（リーダー）達の積極的な指導助言が必要だろう。例とば山中の昼食場での跡の紙屑の散らばりより、又焚火の跡仕末等、あれでは困る。そういう意味でも地元の山岳会員はしっかりといていなければならぬ。

以上条件報告というよりは雑感記録になつてしまつたが、お許しいたゞさい。なをAコースには本会の母校山岳部の現役三名が参加し元気に歩いて来たことを付け加えて置く。

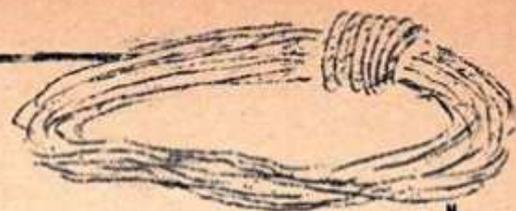
Aコース

(五日) 飯能市↓有向谷落合↓日向沢の峰↓天目山(茶臼宮)

(六日) ↓アララギ山↓長沢山↓草の木のツケ↓白岩山↓三峯神社ま三峠口

Bコース

(五日) 飯能市(五三〇頃)↓河又↓金富山↓蕨山↓樞小屋の頭↓鳥首峰↓白岩山↓名郷(三〇頃)↓飯能市



私と一の倉



辻 勝 四 郎

五月の旧道は何時もぬかつて乾いたた
めしが無い。そんな泥んこ道をひよいひ
よいと歩きながらマナが沢を過ぎる頃か
ら、私は或る朝倉に胸をふくらまし始め
る。

「あの角をまがればカマツミが見えて
来ても、あそこを折れると樹の澤が顔を出
して、そしてあの辺から一の倉が見えて
来る……」

毎年春の一の倉の出会いに立つた時、私
は「ようやく今年も山に来たな」と思う
。そしてまだ冬の一の倉には手の出ない
自分が、今年はどこどこを登ろうかと長
い冬の向心の中に暖めていたものを確め
るようにそれらのルートを一つ／＼丹念
に眼で追うのである。

◇

私が初めて一の倉を見たのはもう大抵
以前の高校時代の事である。

霧が立ちこめる陰惨な一の倉、初めて
見る自分にとってそれは想像の枠を超え
た胸の底に響いて来るような景観だった
。暫らくは代を忘れて立ちすくんでいた

が、一方で誰かが恐らくは感下るであ
らう単純な抵抗意識にも似た多感な少年
期の情熱が、既にその時一の倉を登るべ
きルートとして心に決めてかかっていた
。その時から、山と言えは一の倉が私に
は直接的に結び付いて来た。その彼何度
一の倉の門をくぐったことだろう。だが
無家内の、果敢の、悲しき何度通つても傍
徨を繰り返すだけで南校テラスにも仲々
辿りつけなかった。

そして時には「一の倉は何時迄たつて
も俺達には登れないんだ」とあきらめた
事もあるが、もうその当時には一の倉
登はんとはなうことが以前の情熱の対象か
らもつと現実的な義務として植と付けら
れてしまっていたのだろう。私は何時の
間にか、又つまさきを一の倉に向けて歩
き出していた。

私は初めて一の倉を単独で登った。
初めて一の倉を見て驚愕のうちにも必ら
ず登るんだと自分に誓ってから五年目の
事である。その年の五月＼と一踏に残雪

私はいろいろ／＼なパートナーとこの谷
登った。気も杖も信じ合ったパート
ーを租むと言う事が少々セイタクな注
いであつた私の境遇では、沢オに難か
しい登はんに移つていつてもそれが当
人にとつて決して良い結果をもたらさ
ないことを知り乍ら、登りたいたい
と思つて持つと言うだけでその技術を不
向のまま、マイルを結ぶことが多かつた
阿等アイソドックススな岩登りの課程
を踏んでは来なかつた自分には「絶体
落ちない」という目安ほどにもなか
つた。だからと告つて「登ればいゝん
だらう」と式のセオリを無視した登り
方に自分を陥す事も出来なかつた。

同時に自分の技術を磨く為には私ほそ
の後もしば／＼西丹沢あたりの小さな
山に度々登り歩はならなかつた。

登攀ノート

山はもう秋に入つていたが、物凄く
暑いエボシスラフだつた。俺達は背後
からの容赦のない陽差しを受け乍ら黙
々とスラフを登りつゞけていた。

その時一の倉のすみ／＼までもゆる
がすような轟然たる物音に、俺達は思
ひず雷に打たれた杯に立ちすくんだ。
俺達は原因のわからない恐怖で互いに
顔を見合せていたが、向もなく腹にひ
びく杯の音も抑えて俺達の外は誰一人
唇をいもとの静かな一の倉に戻つてい
た。何気なく振り返つて見ると、南枝
のテールリツジの末端からきれいな雪
塊が本谷の雪沢の上をコロ／＼といく
つもいくつも落ちていった。

俺達は一か含かいたずらの正体を見
届けると又のろ／＼とエボシスラフを
登り始めた。

エボシスラフの途中から降り始め
た時は本谷バンドに着く頃はもう平
降りになつていた。ミルア色のガス
が立ち込めて繁々なつた両足を通し
ては、濡れで鈍く光る岩肌を疎いて
ほもう何も目には入らなかつた。

不吉な予感のする本谷バンドで、
雨の音を耳にしながら俺は決心の付
かぬまゝにしほらくは焦臭の定まら
ぬ目で厚い霧の幕を眺めていた。

だが滝澤下部を登るといふ二人連
れの影がバンドから霧の中にすいこ
まれてしまふと、俺は急に我にかま
つて何者かに追われる杯に暗いルン
ゼ目指して濡れた岩壁をよじ始めた。
心なしか雨は一戸強くなつていた。

二の沢の中程まで来た時、一旦小
止みになつていた雨は篠付く杯に強
くなつて、雷鳴が一二度スラフの岩
肌を震るわせた。もう我々は下るよ
り外に手はなかつた。岩場には早く

雪沢の上を流れて来た冷い雨水が溢
出して、ホールドを握む指先も急激
に感覚を失なつていった。雨やどりす
るところとてない展けたこの岩場では
ともかくも急ピツナで安全圏に逃げこ
まなければならなかつた。だが隔時下
降を繰り返す我々には気がかりあせつ
て飽胃を稼げないばかりか、指先が完
全にマヒして来るといよ／＼スリツカ
の可能性が付きまとつて来た。

今日無事に降りられたらもう一の
うなにかこんりんが登らぬぞい
眠の中に潜みこんで来る雨を耐えて
はウチノ／＼になつたカイルをくり出し
下り、俺はあなかも眠でその滑落をさ
まえるように、下つていく／＼の動きにし
と眼を注いでいた。

中央壁を登つた時は、その基部から
寸先にピツカツトで登り続けたせい
もあつて妙に時間をくつていた。藪を
合けてようやく稜線にはい出て見ると
隠はもう山の肩に汲みかけていて、山

の西側では豊富を我々が陽に映えて異
常な程の明るさを残していたが、足根
一つ晴れた一方ではもう寒々とした夜
がやつて来ていて、こまかい山ヒダの
向に濃紫のモヤが静かにしのび寄つて
いた。

嶺剛の分岐から俺達は夜目にも白い
雪沢をマキヲ沢へと滑り始めた。その
雪の白さが宙の中にすい込まれてしま
うと我々は宙のしずみかような藪の中
に入、ていた。その藪を泳ぎ下り俺は
木の梢に黒気味な程に冷く光う大きな
星を認めて思わす宙の中で足をとめた
。「そうだが今日もこゝでは二人の登山
看が岩から転落して死んでいった」。

何回も登はんを志し乍ら途中で雨に
たづられたり、他のパーティーの墜落に
遭遇したりして今年の一の倉のアルフ
アールンヒは自分にとつて妙な引掛り
を持つていた。そして足をほこぶこと
四度目、俺はゴヒパーティを組んでよ
うやくルンヒを登り抜けると一の倉尾

根にヒび出していた。もう岩壁の火
処に紅葉が鮮やかな色どりを添える
秋であった。

カのない足どりで尾根位に帰路
に付いたが、そんを我々にお捕い
く秋の日のつるべ落しは急速に足元
を奪つていた。土合の灯を求め乍ら
くら宙の中で径を踏み違えてカサ
カサとマブの中に入り込んだり、何
回も木の根に足をくらくつてもんど
リ打つと、もうマケになつて西鬼尾
根の途中で「ドカツ」と足を投げ出
してしまつた。

我々はそこで思い出したように焚
火をたいた。その火を消す段になつ
て、水もないはずの／＼が何の造作も
なく火の前に立ちほだかつて消火作
業を始めた時、今まで忘れていた笑
いが一時にこみ上げて来た。

だがその火が消されてしまふと、
その後には再び足探り手探りで稜
線を繰り返さねばならぬ。宙の空
界が待つて居た。——完——



あの人、この人。

出合の記

過 宏 視

うされたのである。現在秩父にある氏は曇ヲレ小僧と共にこゝを喫を飲つてゐるかも知れぬ。

炭の俵をあむ手ヒビが切れりや
碓坂雪が降る。

過さんとの出合はこれ以前である

過さんが高校三年、私が二年、当

時山岳部は運動場一杯に広がり練習

してゐる各運動部に対するデモンス

トレーション？としてトラックをぐ

るぐる走つたり杖突の樹と樹の向に

カイルを張つてそれを墮つて軽業も

ときに行つたり来たりにして居たもの

だ。そんな或る日過さんに紹介さ小

た。名前を問われたので、過、と答

へると、オ、俺と同じか、と云つて

大きくもない両手で私の肩をアイヒ

押之ついたのである。その両手から

私の背の中に何か靉しい飾り氣の予

いあるものがス／＼と入つて行く

のを感じたのである。以後私は山と

共にそれに登る人にも魅せられゾ

けてゐるのである。但し過さんは学

会報「次枝」も今号は早や十号、三

十年に出発した我会も三年の月日を送

つたことになる。この向うくの人が入

会され、その大部分の人は今会の中核

となつて活躍してゐる。しかし公の隅

の方にはいたすらにヒケを濃くしな

ら相変らず登山趣味を捨て切れな

のゆき。登山音痴も又ゐるのである

。会の方には何の益ともなはず常に先輩

後輩諸元諸師に迷惑を掛け、肩身の狭

い思ひをしてゐる私であるが、せめて

も山岳会前成當時からの会員であるこ

とにわすかな誇りも持たないのである

。さらには結成当時よりの株々な人との

出合をあの人の時と綴つてみよう

思ふもつである。

◇ ◇

大正六の生合は才一回總會以前の

準備会に於いてであつた。珍らしく会

場は一番乗りをし一人様に入つて居た

らハンチンカをかむつた人が、今晩は

と入つて来た。しばらく二人を話し

込んでいたが私に対する相手の物勝、

吉茶の丁寧さから彼輩だと断定し氣易

く広答して居た。あとで山泉先生から

紹介されて冷汗をかいた。この人が大

武さんだったのである。高峯山岳部、

ひいては我漢後の母胎の創設者の一人

だつたからである。この誰に對しても

我らぬ態度の謙和さに私はいたく心知

幸に於いては幸とすることばかりはなかつたようである。この当時であつた。二時向目を終つて早速する三年の過と、遅刻してこれから教室に行く二年の過が毎日校門附近ですれちがうとさう誠にやかな噂が流布したのは……。

才一回の総会は浦和のある食堂の二階で開かれた。二階の準備が出来た途下のテーブルを回んで待つ皆に交つて私もホンズリしてると入口の外にオーパーを着た世の人が現われたのである。入口近くに居た私が見付けて入る。手にすゝめたが遠慮してなか／＼入らなかつたのでドアを押して「どうぞ」と言つたら遅之に出た高橋さんの後から野郎兵の中に取しそうに入つて来られた。この世は高橋さんから紹介された。名前は筒井さんである。現在、世次々という称号を送られて会の大立物として大活躍の筒井さんに始めて「どうぞ」と言つてドアをあけたのは私なのである。その光榮あるナヤンスを

与えて下さつた神杯に私は常々深く感謝しているのである。

市川食堂に於ける何回目かの総会に遅刻して「遅くなりました」とお辞儀をして横をむいたら色の黒いアゴの張つた人がどつしりとすわつていた。柿沼先生との出合である。開会中は殆んど何も発言されず熱心に聞いておられたようである。会が終り雑談に移つた時、いつ方より現われたか角瓶より茶飲み茶碗にのみみ／＼と注がれたウイスキーを衆目の中、何の憶するところもなくクビリ／＼とやつたのには思わな惑嘆の吐息を付いた。そして思つたのである、同じ数学の教師にして何と違ふことかと。以後先生はいすれ方らぬ演説の音んべえ共の向にあつて常に上位にランフされていようである。

始めて谷川岳に登リマシヤ沢をやつて肩の小屋に行つたら山果先生を始の数人が附近に屯ろしていた。深

がスの中であつた。

そこから私は頂上に向うたの誰にもなく往を向うたらその中の一人が「谷川岳は初めて」と言つてオホホと笑つた。先生はその人を「コンキヤン」と呼んで居た。近藤さんとの出合である。一人惚然として頂上に向う後で又明快なオホ、が聞こえた。振り返ると流れるがスの向に近藤さんのつばの広い丸い帽子、言うなれば「がスのメートル調べ」の杯な帽子がポツワリと浮んで見えたのである。あたりは全たく静かであつた。老鷹の笛鳴きだけがわすかに聞えて来るだけであつた。



江澄 藤 近

筒井 満栄



Kさん

貴世のことについて何か書く林にと
言う橋集子の命令でペンをとりました
も、い、さてというわけです。

女子会員のホーフであり、実行
力、判断力、そのファイトたるや男子
会員に優るとも劣らな。Kさん頼り
にしてまっせと誰れもが心の中で思
っている貴世なのです。

今夏、合宿に一日おくれるお知らせ
を受けてガツカリしたのは私ばかりで
はなかつたはず。その様に何時も

皆なの精神的支えになつてゐる貴世を

のです。又貴世の紀行文が全報に載る
時、皆の心の中には何人かとしたもの
を感じさせる。そして何時も黙々とし
て歩く貴世の姿を思い考べるのです。

良く単独行で出掛けられ、時々の
へ行きまされたなどと言うお便りを頂く
と、相妻らずやつてゐるなと頼もしく
なります。

いっか南アでお別れして、大きな荷
を背負つて登つていかれる後姿に思わ
ず追いつけて行きたくなりました。後
でその事をお話したら。何故かと云
つていらしたけれど、何か一本の強い
線がぐい／＼と人を惹き付けるそんな
ものを持つてゐる林に感じられたので
す。

先生という取場に入つてベンチをな
子供達と何のファイトで進ま小ていか
れることでしょうか、これからいよいよ
よ技術的にも精神的にも大いに向上し
なけ小はならない私達、夏の至験をま
かしてせ子だけでもしなくてはならな

いことが澤山ありますね。本当に頑
張りましょう。そしていっか貴世が
言つてらした。何時迄もマアと宿の
たたき合える仲間でありたいと思
います。

菅野 達也

一言で云うならば近藤さんは「不
言実行型」である。高校時代は勿論
のこと、会に入つてからも黙々とし
て山行を重ねてゐる。どこに行きた
いあそこに行きたいと口ばかり云
ながら仲々実行出来ぬ者には驚異を
感ずる。何しろ良山に行く。山行
回数が多い。或では男子会員も頼りに
である。

山に登る人には二通りある。その
一つは山行の回数や記録を誇り、と
こそこの山を登つたと云うことを自
慢する者で最近の登山ブームによ
り作り出された多くの登山者はこ
に属する。他の一つは山そのものを
愛し、自己の生活の一端として山に

登り山に主たる者である。

彼せほどの後者に尸する我々の仲間
の一人である。この山を愛する心から
は数々のしみじみとした文章が生まれ
「後夜」のページを埋めてゆく。

又研究熱心な事も驚く程である。ス
キーに行けば皆が滑きことのみに夢中
で、一向にカレンチの丁井で一人で練
習を続け何時の間にかボーケンを物に
してしまふと云つた願ひである。

この事は山行についてモサウれる。
同年の合同登山で初めて円沢水無本谷
に入り、悪戦苦斗した彼せがそれ以来
ガツガツと研究基礎を固め、今年夏
の合宿には一の倉沢に逆入れる程進歩
している。今の充足は未だ数少ないが、合
宿をして女子の北ア合宿に逆発展
させた原動力は一に彼せのこの研究熱
心にある。

この様に書いて来ると、山氣狂いの
男勝りなせせを想像しがちだが、又彼
せくらのせせらしさと山好きとを見事に
調和させている人もの手らしい。後夜

の顔を見た人は彼せの手芸の腕前を誰

でも認めるであらうし、一語に山行し
て人ならは彼せのおいしいマカロニ科
理に、サラダに舌を打つたことだろう。
彼せの部屋は手製の本物ぞっくりの
テントの模倣と山ヲ写真で飾られ、以
前には自分で作つたとは思われな、ワ
ムサツクが背に搔かっていたものだ。

彼せは今春、学窓に別れをつけ、教
取の道を歩んでゐる。彼せの山を愛す
る心はそのまゝ、児童へと向けられてい
る。彼せは今迄は割合に単独行が多か
つたようだが、彼せの研究熱心と山を愛
する心を児童と共に、会に逆も及ぼす事
を期待しよう。

小林 敏子

卒業後またび／＼現役の山行に引平
まれて何かとお話になつた近藤さん
。とても静かた、思慮深くその行動力
指導方には何時も感謝してゐます。自
分の思考はどこまでも通すという心の強
さを持つるをがらその林を人にありがち

独善的で固苦しいところもなく終始

おだやかに人に接せられるそのお人
柄。山に対する情熱でも、あらゆる
角度から山というものをみかつの、心
から山を、自然を愛し、一歩／＼自
分のペースをく下す事に慎重に歩ん
でおられる。登山家によくある強迫
を好んでか？、一人歩きも良くやん
小ます。私達バ心から敬服する人
と小が近藤さん、貴せなのです。



こうほめられるには近藤さん毎日く
しやみでもしてゐないとなさまい
。そこでエピソードを一つ。

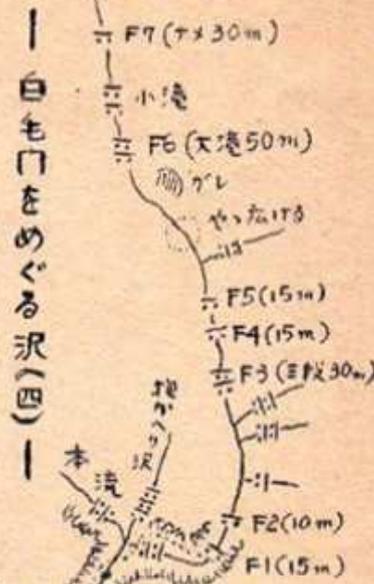
会が発足して向きの頃、事々所
に一通のハガキが舞い込んだ。

小生此度貴会に入会致したく、つ
まましては……。

これを見た悪童達「澄江ヒあるが
こ小はまつと男だぜ、藤原義江の例
もあるからな」という事で男子澄江
君の入会を認めなが、これが花取し、
乙女であつたとは。——編纂子ト



大倉沢



ルート図 (original)

山縣昌彦

〈日〉 九月二十一日 (曇時々晴)
 〈MEM〉 山県昌彦・筒井 満栄

果てるともな、藪漕ぎであった。陽は既に武能岳の稜線に近づき、あたりは薄もやがかかった林にぼんやり白くうつっていた。軌跡を右桶花の枝を押し抜けて覗いた目に、遠く稜線に立つ樹の黒い姿がさながら我々をあざ笑う悪魔の姿のように映った。

白毛門をめぐる沢として、白毛門沢、松の木沢、セニイレ沢に続いて大倉沢を探るべく白樺尾根の取付より奥止の滝に出たのは夜が明け、五時半頃で

あった。右岸沿いにマツをこぎながら、行くと河原が広がる。先の長い事を考えると奥止の滝あたりでもたもたするより、さっさと捲いて河原に降りた方が良さ。

朝食をすませて出発。河原は直まに、なくなつて膝下状となり、時には膝まで冷たい水に浸り乍ら渡渉を繰り返して、スラスラの沢床を溯ると、沢筋は右に折れて見事なトロが現れる。兩岸は垂直、水は底が見えるばかりに澄んで

いるが、とろんとしたその流れはかなりの深さを思わせる。それが見え、百メートルほどに続いて、谷川の秘境と云つても良いだろう。ルートは左岸沿いに時々灌木帯まで大きく高捲きしながら進むより、他をいざ、傾斜は急、草付きはいやな草付きでこのトロを通過するには一苦労した。

トロが終わると正面に急なナメ状の小滝を見て通前に近い程左折する。二段の大ナメ滝を越してなをも溯行を続けると、正面に白帯をかけたような五六十米の滝をかけて抱返り沢が落ち込んで来る。湯松宮平流はここを直前に左折し、手前右手にはやはり小滝をかけて大倉沢が入っている。此処が十字峡である。黒部の上には勿論及ぶべくもないが、谷川のカン合奥にこの杯を見事な十字峡のあるのは知らない人が多いのではなかろうか。

右手から大倉沢に入り、挟まった

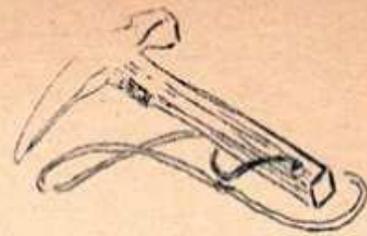
深淵をへずり乍ら進むと一五米程のF
 (仮称)が現われる。両岸ともきり立つ
 た壁で草付きはきりぬけて寒いから水流
 の石隙を半身をシマワリして登らねば
 ならぬ。続くF2(十米)を越え石手か
 ら落ちる小さなナメ滝を見て更に進
 と三段三十米程のF3にぶつかる。左
 側から取りつき中段から右へへと出る。
 続く十五米程のF4、F5と息をつ
 く暇もなく現われ、一向に減るゆ水量
 と谷の大きさに少々あせりを感じて来
 る。自分の知る限りでは紹介された事
 もなく、人の入った形跡もない未知の
 ルートであるだけに溯行の興味は大き
 いが、一方この先はどうかなんだろうと
 いう不安がずと稜線に出る道つきま
 うものである。——と水こぞこうい
 う山の味なのであるが。

程のところを再びむへ戻り、滑り易い
 岩に神聖を供い下らやつと越える。相
 当に緊張させられるのである。なをも
 小滝をいくつかすぎると三〇米のナメ
 滝(F7)。こ水を越えればもう棚はなく
 向もなく沢は二分する。左手は黒ずん
 だナメ滝が上へ伸び右手へ曲つてい
 る。水量の多い石手に入ると向もなく沢
 は伏流となり、樹林帯の中の細々とし
 たガレを木の枝の下をくぐり乍ら出る
 ようになると先のマフコギがそろ／＼
 心配になつて来る。笹ヶ岳から大倉岳
 への稜線は南東に走っているから石寄
 リの方が近い筈だが、二手に分れたガ
 レの石手を詰めると向もなく熊笹と灌
 木のマフコギとなつた。苦斗一時向余
 稜線をと懸つてようやく達した。ここは
 巨大な石楠花の群落で、笠から大倉へ
 の稜線はまだ二、三百米先に夕陽を浴び
 て綺麗にいた。落胆に疲労が倍加した
 我々に対し、相手には石楠花とハイ松
 が加わつたのであつた。

やつと氣が出した稜線、小エボシ
 と大エボシの中向一隅の攻むのも忘
 れて我々はしばらくはしやがみ込ん
 で了つた。やつと出られた。未知の
 ルートであつた。マフコギにせよ一の倉
 の壁を登り切つたときに劣る内解放
 感であつた。夕陽に包まれんとする
 一の倉を改めて眺め、アルンビへ行
 った。辻、篠崎両君の成果を案じ合
 う。もうきと下りにか、つてい
 るにちがいない。或いは駅についているか
 も知れない。我々も急ぎまし
 ようと筒井さんに促がされ、暗くなつた尾
 根径を大倉岳へと向つた。
 白毛門を越える頃短かい秋の日は
 もうとつぷりと暮れてゐた。

タイム

土合	3.15
大倉の先で仮寝	
大倉の滝上部の河	6.00
茶	6.40
↓	9.00
十字峽	9.00
↓	12.30
F7(ナメ滝)	12.30
↓	16.00
稜線	16.00
↓	18.30
土合	18.30



— 谷川岳 —

— の倉メルンゼ —

篠崎 介二

〔 八日 〕 九月二日 (曇時々薄日)
〔 MEMO 〕 辻勝四郎・篠崎 介二

七時一の倉の出合に着く。相にく天
気はあまり良くない。我々が朝食をと
つてこの向にいくつかのパーティーが
通り過ぎていく。

陽も上つて暖かくなり、辻さんのコ
出掛けるか。声に立上つた。メルン
ゼには今日は他のパーティーが入つてい
るだろうか、六月に入つた時は先行パ

ーテイの墜落や落石に見舞われている
ので少々気になる。本谷の雪渓がズラ
ズラに切れているので、今日はツイタ
テのスラフを登らず前衛立派に入る。
六月の時は案外時向をとつた林に思わ
れだが今日は案外時向に出る。

こ、かうルンゼ通しに登つたが、滑
々とした滝にぶつかり右側を捲き乍ら衝
立スラフ上部に出る。此処で草鞋には
き替る。辻さんは今日はまだ風邪が完
全に治つていないので最前から「調子
が悪い」を連発。私も不眠で体中がだ
るくて仕方がない。しばらくは山果さ
ん達が向つた大倉沢の方をぼんやりと
眺めていたが、辻さんに声を掛けられ
て出発した。掛声と共に軽杖を調子で
響り出した辻さんを追つて私も案外ス
ムースに岩について行かされた。カイル
は背のサックに入れたまゝ、でいよく
アルファールンゼに入る。ワラジが負持
良く石にすく付く。Fヨからルンゼ通
しに登らず左側を捲き気味にFヨの見
えろ地奥に出ると、こ、で滝を直ぐし

ている先行パーティーにぶつかると。
「こ小は今日は遅くなるぞ」と辻さ
んがぼやく。我々は左壁から取り付
きトラベースして下らの落口に出る
ルートをとることにする。辻さんの
話ではこ小がノーマルルートである
らしい。前のパーティーは全身に水を
浴びながらサヨクストリンから水の
流れている石壁にとり付いていろ。

こ、で初めてカイルを出し、三ツ
道貝を膝につける。今逆振り返つて
も見ずにいたがもう相当な高さに来
ており、この頃よりや、薄日ももれ
て来て一の倉独特の暗い感じも和ら
いでくる。
辻さんは何度モルートを慎重に試
しかめ、まず自己確保のハーケンを
打つた。私も緊張してカイルを肩に
膝をかざりと確保の体制に入る。こ
こ、で手につぼをつつけ手をポンと
打つて「じや行くよ」と辻さんがし
っかりした足どりで踏み出した。向
もなく姿が見えなくなりカイルがス

ルスルと這んで行く。棚々や向地共で
登る音が、カイルカ動きが止まりルー
トーアインデニクでもしているのであ
う刻々と時向が過ぎていく。やがて
カイルカを打つ音が心地良いひびきで
わつて来た。向もなく落口に出たと
いふ「登つて来い」と声が掛つた。

カイルはびんと張つてゐる。中向の
カイルカが打つてある処までは比較的
容易に登れた。ハーケンを抜いたがま
でその先はホールドもスタンスも殆ど
どないらしい。そこで慎重に動き出す
と正面の岩をまわりこんだ処で足場が
切れ込んで一寸足が出ない。こゝ
で「カイルをたよりますよ」「オーライ
の声に一気に岩を回りこんで落口に出
た。辻さんが笑顔で迎えてくれる。

一寸息をついてカイルを付けたまゝ、
ルンビに這つて登る。傾斜がある港が
連続して掛つてゐる。途中なか／＼バ
ランスを要するチムニーに出てバック
アシドニーでようやく抜け出るヒ、そ
こに前カパーテイカ焚火の跡が残つて

いた。我々も大部腹がへつたので此処
で登食をとる。ちやうど前方には大き
な壁が見え、前カパーテイカが取り付い
ている。最後の急場F内である。我々
はしばらく見物さきのこむ。時向を訊
くと一時五分との事。連中はF内で全
身が濡れになつてゐるのでガタ／＼
震えながら登つてゐる。ラストが素早
い調子で登つていつたので我々も動き
出した。どの時前のパーテイカの落した
石がピコンと我々の身をかすめ行つ
た。この川には少々胆を冷す。

落石の危険を考へて我々はF内の正
面を敬遠し右側の草付混りの露岩帯を
登る事にする。ここは菅野さんの友
人(千葉大山岳部員)が墜落死亡したと
いうイワフツきの処である。この草
付は相害に悪く全体に草が寝てホー
ルビに乏しい。

カイルは一杯にのびたがなか／＼確
保場所がないらしい。ようやく「登つ
て来い」の声がして登り出した。確保
してゐる処は非常に不安定なところで

ロルフビレイのハーケンもハンマー
の一番でスポツと抜けてしまった。又
辻さんが登り出す。四五米トラバ
スして直上ルートをとろうとするか
悪い。そのまゝ、わずかなリスにハ
ケンを打つて左へトラバースする事
になつた。草付きに穴を掘つて手が
かりを作り慎重に回りこんでF内の
落口に出た。今度は自分の番だ。辻
さんが苦勞してゐるのを見たので緊
張する。ハーケンまではスムーズに
トラバース、こゝでハーケンを抜
に掛つたがなか／＼抜けない。カー
杯ハンマーを振つたら落ちてしまつ
た。「もつたいないから拾え、カ
イルを後めろを」には驚いたが今人と
かバランスを保つてようやく落口に
降り立つた。こゝからはカイルを解
いて最後の岩の滑いたツメを登る。
ようやく、思いで一か倉尾根にと
び出し一か倉岳を登り西黒尾根を下
る頃には完全に夜がやつて来て、上
合に着いたのは九時であつた。(終)

編

集



雅

記

致ある山岳会の会報の編集後記とやらには、選刊の苦寂が付きものである。会報の発行と云う仕事が如何に困難で時間の掛るものであるかと云うことは、実際にこれにたずさわつた者には身に沁みてわかることである。

殊に我合の場合、編集者は即ち筆耕者であり、印刷者であり、そして製本屋でもあつたのだから、その苦勞は推して知るべしと云うところであらう。だから山岳雑誌などに、やがて印刷が悪いのか、編集が悪いのかと手さばしい評を受けたりしても、これも又無理もない話である。だが会報というものがその会の性格を、雰囲気をも、そして知性を表示するに大きな役割を果すものとするれば、これは全然おろそかに出来ない

向題である。そしてそれが会運営に於いて大きな比重を占めるものであるとすれば、より良い会報の発行に会員全体が出来の範囲で惜しみない協力を私うと云うことは当然の義務として論を待たない。今号は予定より四ヶ月遅れで発行の運びとなつた。会報発行という仕事の一部の者にだけまかせられていたのでは決して良い結果は得られないうと云う事を強調して、選刊の苦寂けに替へた次第である。患しからず。

本号は当初は、「創刊十号記念」とでも銘うって発行する予定でしたが、ドタバタにきて内容的にどうかとも思われ、引込めてしまつた。だが今迄の会報からすれば、いくらかの企画性が認められても良いのではないかと自負するものである。

座談会というものは本来もつと面白いものがある。話題が卑劣なものであるが、我合の現状では「会の在り方」ということが話題として採りあげられたのは

是否もない。もっとも今回の座談会というよりも討論会に近いものとなつてしまつたが、アンケートには皆さん多教解答を寄せられました。これを見ると我合には案外にロマンチストが多いことが感じられる。編集者としては実はもっと激しい意欲的なものを期待していたのだが。最後に筆耕が汚くて読めづらうことをお詫びいたします。(介)

漢校才十号
発行日 昭和34年4月1日
発行所 漢校山岳会
浦和市高砂町五八九
代表 辻勝山郎



溪稜山岳会

埼玉県浦和市高砂町5-89